

Cotton Up



こっとなあつぷ Vol. 122



清々しい朝！

今日も仕事やるぞ！

おっ！

作ったタコルアーだ！



～「仕事をするということ」 その「前」と「後」にある モノ コト 人～

目次

- ・「回る」 佐藤哲也理事長 <2 ページ>
- ・「TDSN (Tanpopo Daily Support News) 45」
～仕事をするということ～ <3～7 ページ>
- ・後援会のご案内・2017 年度会決算報告 <8 ページ>
- ・編集後記 (編集部) <8 ページ>

回る

理事長 佐藤哲也

今年は幸いにも、桜の開花から散り際まで穏やかな天候が続き、満開の桜を堪能された方も多かったのではないのでしょうか。

さて、昔から、「金は天下の回り物」と言いますが、ご存知のように、これは、金がない者に対し、「金は一箇所にとどまるものではなく、常に人から人へ回っているものだから、今、貧しいからといって悲観するな。まじめに働いていればいつか自分のところにも、回ってくるだろう」という励ましの意味をこめて使われることわざです。

ところが、金ではなく、「人材」ということになるとこのようにはいきません。大勢の新卒者が社会に巣立つ時期だというのに、そして、まじめに働いているというのに、人材は回ってはきません。どうなっているのでしょうか。人手不足は深刻です。

回ると言えば、鉄道マニアの孫と「JR 東京近郊区間大回り」というものにチャレンジしたことがあります。ご存知の方もいらっしゃると思いますが、これは、JR 一区間の切符で電車を乗り継ぎ、一筆書きで関東一周大回りをするというものです。これは不正乗車ではありません。JR はインターネット上で、「大都市近郊区間内のみをご利用になる場合の特例」として、東京近郊区間、大阪近郊区間、福岡近郊区間、新潟近郊区間、そして、仙台近郊区間の路線図を載せ、注意事項まで付けて大回りを PR しているのですから驚きです。

私たちが回ったルートは、大船<東海道本線>茅ヶ崎<相模線>橋本<横浜線>八王子<八高線>高麗川<八高線>高崎<両毛線>小山<水戸線>友部<常磐線>上野<上野東京ライン>戸塚という路線でした。途中下車はできません。これは、大船から戸塚まで行くのに、反対回りで途方もなく大回りするという愉快的計画です。運行距離は438km、所要時間は12時間48分。運賃はパスモで8,176円かかるところを160円の切符で行って来ました。三浦半島に住んでおりますと、大船、横浜または、東神奈川まで出ないと一筆書きができない不便さがあります。横須賀から大船までの往復の時間や高崎駅のホームで立ち食いそばを食べる時間を含め、トータル14時間半ほどの電車の旅を楽しむことができました。

驚いたことにこの大回りの区間にはトンネルがなかったように記憶しています。三浦半島の路線のようにトンネルで沿線の風景が遮断されることがありませんので、車窓の風景を満喫し、関東平野の広さを実感することができました。もう一つ驚いたことは、同じルートを回っている人達がいたということです。小学生の男の子とお父さんの組合せや、中年の男性の一人旅など、数グループがおり、乗り継ぎの駅で、また会った、また会ったとびっくりしたものでした。

この大回りのポイントは、横須賀からパスモで入り、大船で一旦、改札を出ます。そして、戸塚までの切符を買って改札を入り大回りをスタートします。一筆書きをした後、その切符で戸塚の改札を出て大回り完成です。そして、戸塚をパスモで入って家路につくという段取りになります。もし、この大回りを知らない駅員さんがいて、トラブルになるといけないと思い、JRのお墨付きをプリントアウトして持って行ったのですが、余計な心配でした。

驚いたことに、戸塚で自動改札を通らず、駅員さんに切符を手渡しして、「大回りです」と言ったところ、「ありがとうございます」という言葉が返ってきたのです。この若い駅員さんの一言で長旅の疲れは吹っ飛び、さわやかな気分になることができました。孫はこの後、電車好きの友達と別のルートで5回も大回りをしています。

日々、忙しい仕事に追われ、一本道を猪突猛進されている方も多いと思いますが、たまにはチョッと回り道をするのもいいのではないのでしょうか。普段は見ることができない風景を見られるかもしれませんし、素敵な出会いがあるかもしれません。ストレス解消にも効果があると思いますよ。

「T・D・S・N (Tanpopo Daily Support News) 45」

仕事をするということ

仕事をするということ。それは、目の前の対象に対して、作業をするということ。しかし、目の前の対象に対してだけの作業では、仕事を成し得ないのではないか。仕事をするには、その「前」から繋がってきた時間やモノ、コト、人。その「後」に繋がる時間やモノ、コト、人がある。

今回は、その仕事の「前」と「後」について、2名の利用者の話をしていきたい。

「前」について

平日の日中に働いている方々は、朝起床して、家や暮らしの場を出るまでの生活、「前」がある。よくある風景として「あと5分寝ていても大丈夫と布団の中で想い、中々スタートできない。スタートしてからは急ぐ、または急かされている。朝の1分は日中の10分に匹敵する。」等と、何とか家を出発。そんな調子だと、職場に行ってから中々良いスタートが切れなかったり…。

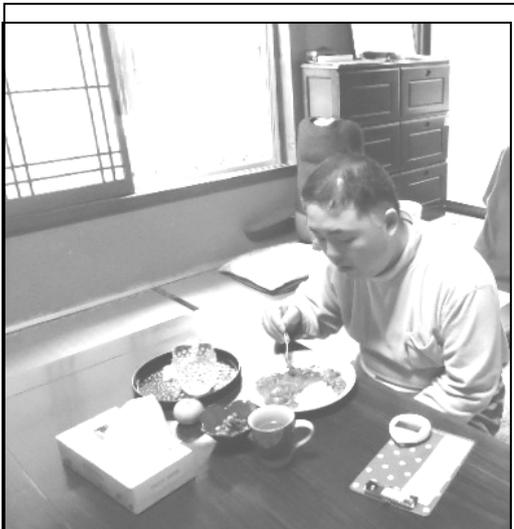
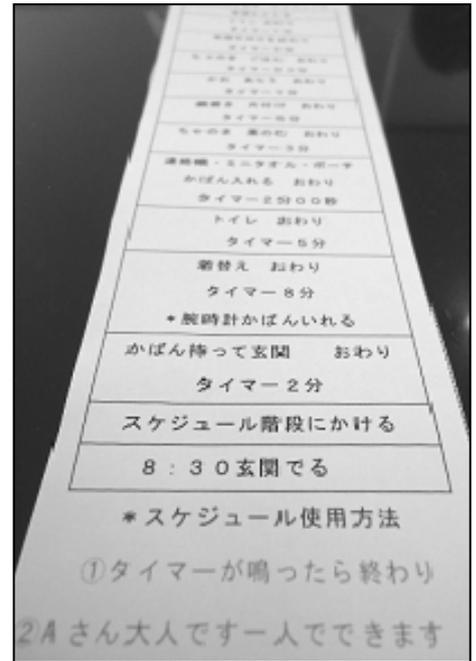
Aさんは、現在家庭にて父母本人の3人暮らしです。Aさんの家庭生活について、ご両親より相談を受けました。2017年8月31日(木) 晩より、急にAさんは母の言うコトを聞かなくなったとのこと。その晩は、急に気温が下がり、母がAさんの布団を厚掛けにしたとのことでした。その晩以降、お風呂の時間が今まで以上に長引く、活動の合間にボーっと立って止まっている、就寝時間が遅れる。朝はしゃべりまくって行動が進まない。Aさんを出発時間に間に合わせたいがために、母がAさんに服を着させて何とかAさんは家を出ているとのコトでした。

その相談の中から、Aさんが起床から家を出るまでのコトについて、支援を実施した話をしたいと思います。母からは「あの朝の時間を、どうにかして欲しい」という依頼でした。そこでAさんの朝の現状を観させて頂きました。Aさん宅に入って、まず気が付いたのが、時計の数の多さです。玄関、リビング、居間各部屋に1つずつ、Aさんの部屋には2つの時計があり、それぞれ少しずつ時間がズレていました。そしてAさんの様子は、2階自室で起床して布団を整え、自室前のトイレに入る。そこまでは一人で行動。その後、家族がいる1階キッチンへ行き、朝食が並ぶ食卓に座りました。しかし、中々食べ始めず、何かを待っている様子でした。その間に、両親から「早く食べなさい」等、様々な情報が入り、Aさんはそれら一つ一つに対して実直に返答、しゃべりまくっていました。結局、食事を残し下膳。その後の服薬、洗顔、歯磨き、着替え、荷物準備へと。その後も活動毎に「ほら出る時間の8:30なっちゃう」「今日は、冬物のシャツ着て」等と、Aさんを想う母の掛け声がありました。その掛け声が、Aさん自身の行動の始まりであったり、逆に返答することにより行動が一旦止まっている様に、第三者である支援者には、そう観えました。

Aさんは、今年で43歳。一人の立派な成人男性です。しかし、母と話していくうちに、母から観たAさんは5歳のまま。口調が当時のままだからそうです。だから、どうしても母がAさんに「これして、あれして」と言い生活をしてきてしまったのと親心を漏らしていました。

実際にAさんの生活の場を観聴きして、家族3人の時間の流れ、家族の会話のタイミング、Aさん自身の行動の始まりと終わり、Aさんが何を頼りに、今行う活動や時間の経過をどのように意識しているか。そして、Aさんが通う日中活動の場ふあずで、一人で行動して出来ていること。家庭での「今」、ふあずでの「今」。これらの情報を整理、評価した上で、Aさんが一人の大人として、家庭、家族の中で生活できるスケジュールを支援者が作成して提案をしました。

形態は、ふあずで「今」使用しているものを参考に家庭生活に応用。「どこで、何を、終わったら次はどうか」を文字で示した家庭用生活スケジュール。「始まりと終わり」時間の見通しを知る手段としては、タイマーを使用。提案したスケジュール内容は二つ。一つ目は、生活の流れは今まで通りで、Aさんがそれぞれの活動に集中できるように、場所への変更を盛り込んだモノ。二つ目は、Aさんの動線を整理した生活の流れを盛り込んだモノを提案。相談結果、一つ目をご家族が選び、Aさんにはスケジュール内容を確認した上で、了承を得て3日間の家庭生活支援を行いました。



支援後の朝食風景

スケジュールを家庭内に導入した初日。支援者がAさんの側で付き添い、必要な箇所で必要な支援を行いました。変更した活動場所へは支援者がAさんを誘導。活動の始まりと終わりは、43年間の生活とはガラリと変えました。自分でタイマーをスタートし、その活動を開始する。タイマーの経過を見ながら行動をする。タイマーが鳴り終える前もしくは鳴ると、その活動を終える。この流れを、支援者は見守りながらも必要に応じてAさんがタイマーに意識が向くように支援をしました。それぞれの活動設定時間は、今までの家庭生活での行動ペースとふあずでの行動ペースの評価より、ご家族や支援者側が期待する時間を、Aさんへ提案して記載。そのため、支援者は、Aさんの行動ペースと時間の経過を見ながら、行動しにくい場面がないか等の評価も同時に行いました。結果、当初の設定時間を超す活動もありましたが、Aさんが起床してから出発できるまでの準備を完了したのが、8時05分頃。出発までに余った25分で、今まで「しゃべくりまくっていた」というAさんにご家族との話の時間を、そこに設けることができました。

2日目は、初日の評価結果、設定時間とAさんの行動ペースが合わなかったものを調整。設定し直したスケジュールを提供しました。支援者は、昨日より離れた位置でAさんの行動を評価。改正した設定時間内にそれぞれの活動を一人で終えることができました。

3日目は、離れた位置で、母と支援者で「どのようにAさんが1人で行動しているか」を引き継ぎました。Aさんが、1人で行っている間は、なるべく両親からは話しかけず、話しがあるのなら、出発準備ができ、余った時間で話しをして貰いたいことも同時にお願いをしました。

3日間の家庭生活支援後のAさんの変化を観て、母としては、今まで私が言えば動いていた子だから、こういったもの（スケジュール）は使わなくなって大丈夫だと思っていた。また、スケジュールの一番下に記載されていた「Aさん 大人です 一人でできます」を読んで、母は「ドキッとしました。Aは大人なんだって」。



スケジュールを使って一人で支度



出発時間に「行ってきまーす」

2018年3月30日（金）。約3ヶ月振りにAさんの朝の様子を観に家庭を訪問。Aさんは、スケジュール内容を確認して、タイマー表示を見ながら颯爽と一人で朝の支度をしていました。7:50分頃には全ての朝の活動を終えて、出発する準備ができていました。母からは「よくできたね」と声を掛けられました。Aさんはキッチンの椅子に座って出発時間まで、母と夕方帰宅後のコトをゆったりと話していました。

母からは、「支援者のおかげで、Aさんがよくやってくれるようになった」というお話がありました。支援者からは、「決して支援者のおかげではなく、Aさん自身が得意とする視覚情報より、いつ、どこで、何を、終わったらどうするのか。そのことをAさんが理解し、そのスケジュールを使いながら一人で行動を取ることが、家庭でもできるようになったからです。」また、「このスケジュールは、Aさんが一人で活動するにあたって今は頼りにできる手段として使用しているだけであって、ゆくゆくは外していけるとおもいます」とお話をしました。

Aさんは、一人で行動して、その上家族から褒められる言葉を受けながら家を出発。

きっと、そんな朝は気持ちよく仕事に入れるのではないのでしょうか。時々、出発準備完了後の「お話」が区切り悪く、遅れることもあります。まあ、生活していれば、色々ありますから。



「後」について

ふぁずでは、地元産業である釣り具メーカーYAMARIA Corporation よりイカやタコのルアーを組み立て作業等を受注しています。



大物タコを釣り上げた ドヤ顔の友人

ある日、作製者でもあるBさんが作業途中に、作業には必要ではないと思われる行動をとったことがありました。その対応を模索しているところに、私の友人から東京湾にて2.8kgのタコを釣りあげた（左記写真）という連絡を貰いました。もしやと思い「ピンク色のタコルアーで釣った？」と友人に質問をしたところ、ルアーの画像と釣り上げたタコの写真を友人が送ってきてくれました。それはまさしく YAMARIA Corporation から受注して作製したピンク色のタコルアーでした。友人が大きなサイズのタコを釣り上げ、ある釣り情報誌に載ったのも嬉しかったのですが、ふぁずで作っているルアーが、

実際に海でタコを釣り上げたという結果に繋がっていることに喜びを感じました。早速、そのことを、作製に携わっている利用者に画像を通して伝えました。利用者はそれぞれに反応、支援者が「タコです」と指差した画像を、本人達も指差していました。そう言えば、ふぁずの日中作業で、色々な商品を作製してきたが、利用者が作った商品の「その後」を知る機会がなかったなあと。



大物を釣ったピンク色のタコルアー

タコ釣果情報を貰う前のBさんがとった、その行動の背景を色々推測しました。その内の一つ「作業への慣れによるモチベーションの低下」もあるのではないかと仮説を立てました。そこで、本人がモチベーションを上げ作業に取り組めるには、どうすれば良いのか。作業へのモチベーションは、人それぞれ。色々複雑に思い描くもののピンときたものは、これ、作る人であれば、自分が作ったモノが実際に「その後」どうなっていくのかは、知りたくなるのではないかと考えました。実際に釣りに行くのもよいが、まずは作ったタコルアーが商品として並ぶお店に行くのが一番ではないかと考えました。やはり「リアルなモノ」に勝るものはないと。

そこでBさんと支援者2人で実際に近隣の釣具店へ行くことにしました。Bさんが初めて行くお店に安心して行けるように、前日にお知らせをしました。お知らせ内容としては、タコルアーが「作製後」どのように流れていくのか、明日は「どこへ」行くのかを示した提示書（右記添付）です。出発当日には、普段使用しているスケジュール上に釣具店へ「いつ」行くのか「終わったら次は」をお伝えしてお店へと向かいました。



タコルアーの「その後」の流通経路提示物（一部抜粋掲載）



そして、当日Bさんは安心した様子で車輻に乗り、近隣の釣具店へ行きました。店内の一角にタコルアーコーナーがあり、そこには綺麗に並べられたピンク色のタコルアーが大中小とありました。Bさんはそれらを見るなり「これ」と言って、ピンク色のタコルアーを手に取りました。その後、同行した私の手にそのルアーを渡してきました。

「作りましたね。Bさんが作ったルアーは、お店で売っているんですよ」と声をかけました。その後も、Bさんは、店内をゆっくりと回り、ピカピカに光ったルアーを眺めたり、偏光グラスを眺めたり、綺麗にディスプレイされた釣り具に興味津々に見ていました。

ふぁずに戻り、Bさんはタコルアーを作製。完成品に対して「よくできました」とBさんへ声を掛けました。その後も、Bさんは、リズムよく高い精度でタコルアーを作り続けています。作製数も、半日で40個から50個だったのが、今では90個から110個作製することができています。それはBさんが行動で、『今まで以上に高いモチベーションで作ることが出来ているのですよ』と教えてくれているのかも知れません。



**タコルアー作製の様子。
Bさんに合った作り易い高さや
工夫された道具を使用しています。**

後日、その事を釣り具メーカーYAMARIA Corporationの工場長にお話する機会がありました。実は、先方の製造部の方々も同じように、モチベーションを上げるために、実際に自分達で作った商品が並ぶお店へ行っているとのことでした。YAMARIA Corporationの商品は、日本のみならず、海外の釣り具店にも並んでいるというお話です。

いずれは、ふぁずの利用者も「その後」の一環で海外へ見学しに行っちゃおう?! まずは、ふぁずの目の前に広がる海でタコを釣ってからかな。

以上、仕事をする事。「前」と「後」にある、時間、モノ、コト、人でした。

文：酒井

